

私の推薦図書③人間力

企業経営漫談士 岡野実空

「経営人」に必要な能力は、「事業力」+「人間力」。前回の「事業力」に続いては、何ともしつかみどころのない「人間力」の推薦図書です。そこで前回の流れを踏襲し、まずは危機的な状況でしか見えない「人間」の本質論、次に通常の社会で生きるための「自己修養」の原則論を取り上げます。そして最後は、我が国が最先端に行く「サル学」に基づいた、「人間社会」考察のコラム集です。

①『夜と霧』

「人間」および「社会」とはなにか？を考えると、必ず読まざるをえない究極の一冊。極限状態における人間の思考や行動の冷静な考察記録は、ナチスの強制収容所を体験した、オーストリアの心理学者フランクルにしか著せない内容ばかりです。

またその『新版』は、1956年の初版から20年を経て、1977年に改訂されたもの。生々しい記憶が残る中での著作を、以降20年の情勢の変化を踏まえ見直した内容は、それによってさらに普遍性を増し、現在のコロナ禍を経て、世界中で未来へも読み継がれていくロングセラーとなりました。

その本文にある通り、いづどんな社会にも存在する「まとも」と「まともでない」人間。その集団の中で、何か重大な決断を迫られたとき、まずこの本を再読してからすることにしましょう。

②『向上心』

フランクルのいう「まとも」な人間に近づくため、平時に読む教則本の筆頭。因みに2番は、同じくサミュエル・スマイルズの『自助論』。今回、『向上心』の方を取ったのは、ミドルという皆さんの立場ゆえ。新社会人やその意味も考えず、ひたすら「自助」を叫ぶ政治家？などには、もちろん明治初期から読み継がれる『自助論』をお薦めします。

さてこの本は、個人の成長と「人間力」の形成に焦点を当て、前著の内容をさらに充実させたもの。そこからは、七つの海を制覇した大英帝国を支えていたのが、「産業革命」を背景にした「事業力」や「軍事力」ばかりでなく、それを主導する人々の心構えや立ち居振舞いという、優れた「人間力」であったことを具体的に知ることができます。

また前著に続き、故竹内均先生の訳者解説も秀逸。その「人間力」溢れる世界的な地球物理学者の感想文には、本文に引けを取らない説得力があり、私たちの実践を強く促しています。

- ① 夜と霧 新版
ヴィクトール・E・フランクル著
池田香代子訳 みすず書房
- ② 向上心
サミュエル・スマイルズ著
三笠書房 知的生きかた文庫
- ③ ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」
山極寿一著 毎日新聞出版

③『ゴリラからの警告』

ゴリラの国にたびたび留学し、そこに知合い？も持つ、京都大学の山極寿一教授。その学長として、大学や学術会議などの「ジャングル」でひたすら「人間」の対応に追われていた当時、かつて新聞に連載したコラムに、そこからの新たな気づきや知見を加筆した、組織人必読の一冊です。

それは類人猿の視点で「人間」や「社会」を眺め、その問題点を指摘するばかりでなく、彼らなりの対応策を代弁してくれている貴重な助言集です。また「サル学」の始祖、故西錦司氏由来の「人間」の驕りへの警鐘が乱打されているだけでなく、とき（特にコロナ禍）には、彼らの行動の方が合理的であることも指摘されています。それにしても、読む度に付箋紙がこれほど増える本は珍しい！

さて前回に倣い、後半は「人間力」に関する推薦図書3冊の総括です。それはまず②の文中にある、「高いところへ登れば登るほど、サルのしっぽはよく見える」という英国の諺の引用から。ましていまのコロナ禍で、上に立つ世界中の人間のアアはまる見え。そうならないよう、私たちは「サルの知恵」も借り、「人間」としての精進を重ねましょう。

今回の締め言葉は、かつて「サル学」の存在を世に知らしめた、立花隆氏の名著『サル学の現在』の帯にあった、自戒のコピーから。「サルはどこまで人間か？人間はどこまでサルか？」

2021年4月26日 実空